

京都で培われた“^{かわ}躲す術”

京都地域会の情報はこちら
<http://www.jia-kyoto.org/>

一万人の世界建築家展
<http://www.10000architects.com/?jp>



桂離宮に見るささやかな減災の概念

数奇屋造りの傑作とも言われる桂離宮は京都盆地の西、松尾から少し下った桂川のほとりに位置している。ここは、江戸時代初期、八条宮智仁親王の命を受け、月を愛でるための別荘として建設された。桂川西岸一体は、源氏物語にも登場する「月」の名所として知られており、京都盆地の反対側の東山から上る月が、桂川の水を引き入れた広い池に映る様は今も昔も変わることなく美しい。月の美しさと引き換えに、その立地から桂川が氾濫した際には桂離宮は数回床下浸水の被害を受けている。しかし、その姿を現在までとどめているのは、自然災害に対する職人達の工夫が凝らされていたからである。まず書院全体が高床式になっており、座敷までは水が上がってこないようになっている。また、川と離宮の間には生きた竹がそのまま編みこまれた垣根があり、川の氾濫によって運ばれてきた土砂や瓦礫が、敷地内に流れ込むのを防いでいる。どちらの策も、桂川の氾濫を前提としており洪水を完全に封じるのではなく、ある程度の水の浸入は許容しながら被害を少なくするものである。これを腕力でもって、洪水を押さえ込もうとすれば自然の大きな力に飲まれていただろう。自然の力に逆らわず、災害を“躲す”という日本独自のしなやかさを持った桂離宮はその姿を現在にまで残している。



北山杉を人の手で山から運搬する



高床式の座敷



桂垣



しなやかな日本建築

1945年の戦災で消失した日本の大都市。戦災を逃れた京都ではあるが過去には歴史的大火で幾度となく街が消失してきた。そのため建築基準法では防火性を強調するあまり街から木造が消え、コンクリートと鉄に置き換えられてきた。(現代建築の素晴らしさは論を待たないが…) 一昨年来、国のCASBEEの導入により、環境配慮建築の施策が進み、一気に木造の気運が高まってきた。“森と緑の再生”“自然エネルギーの活用”として、木の活用や打ち水、通風、採光など“過去の生活習慣”から学びとった建築の可能性へとシフトしている。また伝統工法の京町家は地震力を緩やかに逃がすしなやかさを備えている。京都では“平成の京町家”プロジェクトが推進され、現代生活の機能を満たした、“木”の文化としての建築の街並みが作られようとしている。

不条理な風景、「TSUNAMI」

京都は、平安京から1200年余り、巨大な災害に見舞われることなく、幾多の災害をくぐり抜けて今日がある。山と川に囲まれた盆地であるが、それらが天然の要塞であると共に、風水で見定められたおかげが、水と自然に恵まれて発展してきた歴史がある。しかしながら、治山、治水の防災的概念、洪水に見舞われた様子は残されており、川をコントロールすることは、大変だった様である。ただそれらを“躲す術”の形跡が、生活の知恵として垣間見られる。京都からはそう遠くない福井県の日本海側には「原発」が数基あり、今後の行方が懸念されている。30km圏内には琵琶湖が控え、リアス式海岸に沿った「原発群」には“TSUNAMI”が歴史的に皆無であるとは言われていない。今回のような原発事故で、我々は放射能を“躲す術”を持ち合わせているだろうか。

